

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16714

研究課題名(和文) 文学と犯罪学 19世紀フランス文学とデジェネレッサンス(変質)理論

研究課題名(英文) Literature and criminology : French literature of the 19th century and degenerate theory

研究代表者

梅澤 礼 (Umezawa, Aya)

立命館大学・言語教育センター・嘱託講師

研究者番号：50748978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、人間が身体的・道徳的に変質しつつあるとする19世紀のデジェネレッサンス理論の誕生の経緯と、それが社会に浸透してゆくようすを、歴史資料と文学作品から読み解こうとしたものである。

その結果、19世紀前半に誕生した奇形学が、犯罪(精神の奇形と呼ばれた)への関心と結びつくことで、のちのデジェネレッサンス理論を準備していたことがわかった。

文学作品に目を向けてみれば、この時代、作家たちも犯罪者やデジェネレの身体と道徳を細かく描写した。しかしこうすることで作家たちは、個人のデジェネレッサンスではなく、数々の社会問題がいまだ解決されないフランス社会のデジェネレッサンスを告発しようとしたのだった。

研究成果の概要(英文)：The primary aim of this research is to understand the etiology of degenerate theory in France during the latter half of the 19th century. Literary works and historical documents have been examined to track how this theory spread throughout French society. The findings suggest that degenerate theory began in the first half of the century via teratology, a new form of scientific inquiry that focused on congenital abnormalities. At that time, the prevailing view was that crimes were mainly caused by malformed souls. Authors in various genres wrote about this theme. Romanticists such as Hugo and Sue as well as Naturalists like Malot and Zola all described criminals as having degenerate characteristics, both internally and externally. However, these literary descriptions differed from those of criminologists and psychiatrists at that time as they placed the blame for such criminal degradation squarely on the shoulders of French society, whose social problems resembled a malignant disease.

研究分野：文学

キーワード：フランス文学 犯罪学 精神医学 デジェネレッサンス

1. 研究開始当初の背景

ナポレオンの刑法典(1810)は、犯罪者を矯正と再社会化の対象として捉えていた。約80年後、犯罪学者たちは犯罪者を矯正不可能な、追放の対象として表象するようになっていた。犯罪者の表象はなぜ矯正の対象から追放の対象へと変化したのか。その間、作家たちは犯罪者をどのように描いていたのか。

メインテーマ「文学と犯罪学 19世紀フランスにおける犯罪者表象の研究」のもと、この問題はいくつかの段階に分けて明らかになってきた。その結果、近代社会において犯罪者が少しずつ矯正不可能な者として表象されるようになっていったようす、そのなかで作家たちが犯罪者を常に同胞として眺め、作品世界に生かし続けてきたようすがわかってきた。

しかしこうした研究のなかで、19世紀後半になると犯罪者への言及が減り、かわりにデジェネレ(変質した者)の描写が増えていることがわかった。19世紀後半のデジェネレッサンス(変質)理論は19世紀前半の犯罪に関する理論の延長線上にあるのではないだろうか。

ヨーロッパにおけるデジェネレッサンス理論を紹介したものとしてはいくつか先行研究が存在したが、いずれもこの理論を19世紀を通しての犯罪者表象の歴史の中に位置付けるものではなかった。また文学作品におけるデジェネレの描写についても、社会全体のデジェネレ表象の変化を意識して論じた研究はなかった。

2. 研究の目的

そこで本研究は、(1)デジェネレッサンス理論の誕生の経緯を明らかにする、(2)作家によるデジェネレ描写の特徴と意義を明らかにする、という2つの目的によって開始された。

そして、20世紀にかけて各国の優生学的措置の原因ともなったデジェネレッサンス理論が、フランスにおいては19世紀前半の犯罪者表象の延長線上にあることを証明し、フランス内外の医学や優生学の歴史にも大きく貢献することを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

全体的な方法論から述べると、本研究は、文学研究であると同時に、犯罪学や歴史学も視野に入れた、文系分野では先端的な学際研究でもある。まず犯罪学と言った場合、一般には19世紀末以降の犯罪理論を指すが、本研究はそれ以前の、さまざまな分野の学者はもちろんのこと、ジャーナリストや作家といった一般人による犯罪者・デジェネレの表象を分析した。これにより、より生きた犯罪学史が明らかになるだけでなく、著名な犯罪学者たちの思想の特徴や意義についてより深く理解できることが見込

まれたからである。

歴史学においては、本研究は、その主観性ゆえ本来ならば資料とされにくい文学作品をも分析した。これにより一つの社会全体の犯罪者・デジェネレの表象が初めて明らかになると思われたからである。また歴史資料を、その作者や発話者の意図やレトリックに注意し、いわば文学研究の手法で分析するというのは、歴史と文学の共同研究の可能性を広げることにもなると期待できた。

文学研究においては、歴史家の研究を参考にすることはあっても、自ら歴史資料に当たるのは稀であった。だが本研究では、19世紀を通しての犯罪者・デジェネレの表象の変化を理解し、その上で作品は読み返された。これにより作家たちがどのように、なぜデジェネレを描いたのかが初めて明らかになるとともに、近代社会における文学の位置を理解することにもつながるだろうと考えたためである。

こうして、研究の1年目にあたる平成27年度は、19世紀前半の奇形学理論がどのように犯罪問題と結びつき、デジェネレッサンス理論にたどり着いたのかについて、フランス国立図書館所蔵の歴史資料を中心に調査した。平成28年度は、1860年代に起こった精神病患者の強制入院をめぐる議論に注目し、これがデジェネレッサンス理論をどのように発展させたのかを、フランス国立図書館所蔵の医学論文を中心に探った。そしてそのなかで、一般的なデジェネレの表象が、ゾラやマロといった同時代の作家の描写とどのように似てどのように異なっているのかを分析した。

4. 研究成果

<平成27年度>

平成27年度は、まず、19世紀前半の犯罪者の手記と世紀後半の詩人の作品を比較した論文を日本フランス語フランス文学学会学会誌 *Littéra* 創刊号に投稿した。本学会誌は、国外への発信を目的としたものであるため、厳しい査読を経た論文のみを集めたものであり、そこに掲載されたことは本研究の成果が世界的にも認められうるものであることを示している。

また、日本フランス語フランス文学会秋季大会では、精神障害者というデジェネレを作家たちがどのように描いたのかについて、ゾラとマロを例に自然主義研究会で発表したほか、ヨーロッパにおける科学と文学の相関関係に関するワークショップを企画し、自らも発表した。

本研究は文学だけでなく歴史学にも関連する。関西フランス史研究会では、本研究の土台となる19世紀前半の犯罪者表象について発表した。

最後に、本研究の射程はフランスにとどまらない。ベルギー研究会ではフランス犯罪学

とベルギー犯罪学を、デジェネレッサンス理論に注目することで比較した発表を行った。

<平成28年度>

平成28年度は、精神病患者の強制入院をめぐる議論がマロの登場人物創造にどのように反映され、それを受けてゾラがどのようにデジェネレを描くことになったのかを、日本フランス語フランス文学会春季大会において発表した。

また、日本・ベルギー修好150周年記念シンポジウムにおいて、ベルギー人精神科医の理論と彼の執筆した近未来小説を比較する研究発表を行い、本研究を国際的に広めるとともに、学際的交流を目的とした同シンポジウムに大きく貢献することができた。

なお、平成27年度の研究をもとにした、デジェネレッサンス理論の誕生と発展に関する論文は、オープンアクセスの紀要に発表された。そのほか、平成27年度から継続していた翻訳『犯罪・捜査・メディア 19世紀フランスの治安と文化』（ドミニク・カリファ著）を、原初になかった図版を加え、同テーマと文学の関わりについての解説も載せて出版した。そしてこの出版に合わせてフランス人著者の講演を企画し、所属機関で開催し、同時通訳も務めた。この翻訳と講演会企画により、当該分野を一般にも広めることができた。

<まとめ>

以上2年間の研究により明らかになったichi 罪者の描写が現れた。身体と精神が遺伝的に悪化した、デジェネレとしての犯罪者象徴である。こうした人間の存在を明らかにしたモレルの『デジェネレッサンス理論』は、のちの精神医学や犯罪学の土台となったほか、文学にもその影響は見られる。

しかしデジェネレとしての犯罪者の認識は、モレルの著作によって突然生まれたものではない。たとえば1830年代、骨相学や奇形学の発展により、犯罪者は精神的にも身体的にも奇形なのだという見解が広まっていた。1840年代には、監獄内で囚人が発狂する現象が問題となった。その中で、犯罪もまたひとつの遺伝性の狂気なのだとする理論が、のちの精神医学界の権威であるバイヤルジェやレリュによって唱えられていたのである。つまり犯罪者は、遺伝性の身体的・精神的欠陥を備えた人物としてこのころすでに認識されていたのだ。

このデジェネレッサンス理論は同時代の文学作品にも反映されている。たとえばシュエの『パリの秘密』に登場するトルティヤールは身体障害を持つ非行少年である。ユゴーもまた『レ・ミゼラブル』で、社会の奥底の暗闇から生まれる隠語の精神と身体を描いている。しかしトルティヤールの身体は、つねに窪みに身をかがめて暮らさざるをえないことにより生じている。ユゴーはといえば、隠語ではなくそれを生み出した社会のほうを奇形と呼んでいる。

1860年代の狂人法をめぐる議論を経て、狂気とデジェネレッサンスの関係が問題になってくると、マロは『義兄弟』で、ゾラは『ブラッサンの征服』で、それぞれデジェネレが精神病を発症するようすを描いた。しかしいずれにおいても、発狂の場面は医学論文に忠実ではなく、さまざまな文学的技法が駆使されているほか、当時問題となっていた精神病院への入院が原因のひとつにもされており、学問的な事実が依然として文学的・作品的現実を道にゆずっていたことがわかる。これらのことは作家たちが、精神科医たちとは異なり、個人が抱えるデジェネレッサンスよりも、19世紀を半分以上経てもなお悪化の一途をたどる社会全体の病理、社会全体のデジェネレッサンスを写し取るうとしていたことを示していたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Aya UMEZAWA, 《*Les Chants de Maldoror et les Mémoires de Lacenaire*》, *Littéra*, n°

1, 2016年、83-91頁。(査読あり)

梅澤礼「精神障害者と犯罪者 デジェネレッサンス理論の形成過程に関する一考察」立命館言語文化研究、28-1号、2016年、281-290頁。(査読あり)

[学会発表](計6件)

梅澤礼「精神科医のSF小説 ステファン・オータンことエチエンヌ・ド・グレーフによる知の越境の軌跡」2016年12月11日、日本・ベルギー修好150周年記念シンポジウム「文化・知の多層性と越境性へのまなざし 学際的交流とベルギー学の構築をめざして」、東京理科大学神楽坂キャンパス(東京都・千代田区)

梅澤礼「エミール・ゾラとエクトール・マロ 登場人物の強制入院と発狂の描写をめぐって」2016年5月28日、日本フランス語フランス文学会2016年度春季大会、学習院大学(東京都・豊島区)

梅澤礼「科学に利用される文学? 『監獄学』の成立過程を追う」2015年10月25日、日本フランス語フランス文学会ワークショップ「近代科学と芸術創造 19-20世紀ヨーロッパにおける科学と文学の関係」、京都大学(京都府・京都市)

梅澤礼「精神障害者の文学表象 エクトール・マロとエミール・ゾラ」2015年10月24日、自然主義文学研究会、京都大学(京都府・京都市)

梅澤礼「監獄から流刑へ 七月王政期における囚人の表象」2015年10月10日、関西フランス史研究会、京都大学(京都府・京都市)

梅澤礼「エチエンヌ・ド・グレーフによる

『殺人犯の心理』 ヘール、犯罪学の分岐点
』、2015年5月17日、ベルギー研究会、大
阪産業大学梅田サテライトキャンパス（大阪
府・大阪市）

〔図書〕（計1件）

ドミニク・カリファ（著）・梅澤礼（訳）
『犯罪・捜査・メディア 19世紀フランスの
治安と文化 』、法政大学出版局、2016年、
358

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

梅澤 礼 (Umezawa, Aya)
立命館大学・言語教育センター・嘱託講師
研究者番号：50748978

(2) 研究分担者

()
研究者番号：

(3) 連携研究者

()
研究者番号：

(4) 研究協力者

()